

# 第5章 アイヌ文化の実践環境と文化の担い手

世良 尚也 | 北海道大学大学院教育学院修士課程  
小内 透 | 北海道大学大学院教育学研究院教授

## はじめに

一般に、教育が行われる場として「家庭教育」「学校教育」そして「社会教育」の3つがあげられる。白糠町におけるアイヌ文化の実践・継承の場合にもこの分類がほぼ当てはまる。当然、文化の担い手は家庭内のみにとどまって文化を実践しているわけではない。それは家庭外にも広がっているはずである。その広がり方は家庭内及び家庭外の環境のあり方が大きく影響しており、文化実践の場が多様にあるということが重要になる。無論、アイヌ民族として文化に精通している者が近くにいる場合などは必ずしもそうではないが、そういう存在が少なくなってしまっている現在、個人の社会的ネットワークによらない環境が文化の実践・継承を支えているのではないか。

本章では、第1節において白糠町の文化実践を支えている物理的な環境・社会集団を紹介し、第2節においてそれらを利用している文化の担い手がどのような意識を持っているのかを検討する。

## 第1節 アイヌ文化実践を支える白糠町の制度と環境

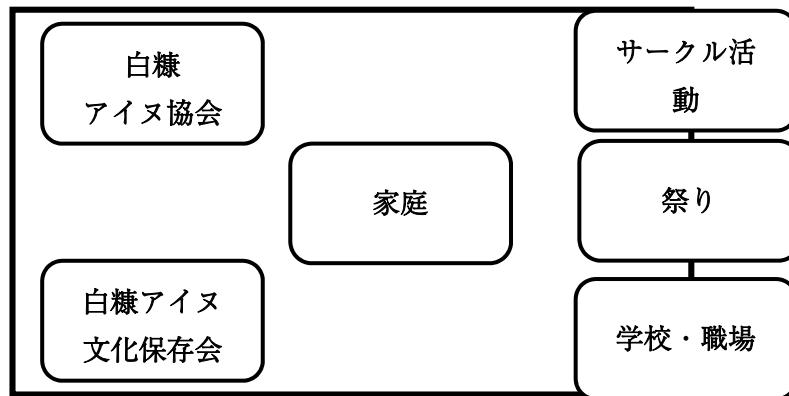


図5－1 アイヌ文化実践を支える環境

白糠町では、2014（平成26）年現在、主に「家庭」「学校（職場）」「白糠アイヌ協会」「白糠アイヌ文化保存会」「サークル活動（シノッチャの会など）」「三大祭り」がアイヌ文化を実践し、体験できる機会を作っている。もちろん、機会を作るためには物理的な空間も必要になる。白糠では、それにあたるもののがウレシパ・チセ（アイヌ民族伝統家屋風の館）、弔魂碑、生活館である。図5－1は、機会を作る集団に注目し作成した。これはあくまでも2014年現在を表しており、時代をさかのぼるにつれてこの集団的な枠組みは変化する。家庭や学校・職場は歴史をさかのぼっても存在し続ける枠組みであるが、白糠アイヌ協会や白糠アイヌ文化保存会、シノッチャの会はすべて戦

横軸分類	時代、法制度、白糠の環境の変遷年表										
	1935年	1945年	1955年	1965年	1975年 北海道旧土人保護法 (1899~1997年)	1985年	1995年	1997年	2005年	2007年	2014年 アイヌ文化振興法
対象者年代	70歳代 1935~1945年生	60歳代 1945~1955年生	50歳代 1955~1965年生	40歳代 1965~1975年生	30歳代 1975~1985年生	20歳代 1985~1995年生	10歳代 1995~2005年生				
北海道・白糠町 アイヌ協会史											
白糠アイヌ文化 保存会史											
サークル活動史											
各種祭り											
その他 歴史的事柄											

図5-2 年代、法制度、白糠の環境の変遷年表

後にできたものである。また、活動の内容も変化する。そのため、各団体の活動内容の変遷、各団体間の関係性を北海道（白糠町）としてのアイヌ文化の取扱いをふまえて歴史的に捉えていくことにした。以下、各団体等について詳しく紹介していく。

### （1）白糠アイヌ協会

北海道アイヌ協会白糠支部は1946（昭和21）年に結成された。同支部は、2014年4月、北海道アイヌ協会の組織替えにともない、白糠アイヌ協会（以下、協会）となった。協会は、三大祭りや、アイヌ文化の伝承・後継者育成活動を行う母体となる組織である。現在、会員数25名であり、近年は協会員の減少が続いている。なお、協会員は後述する「三大祭り」に原則的に参加することになっている。

表5-1 アイヌ協会白糠支部事業一覧（平成23年度）

項目
アイヌ民族の尊厳を確立するため、会員相互の社会的地位の向上、職業の確立及び教育の振興、アイヌ民族文化の伝承保存の推進を図る。
アイヌ民族伝統儀式の実施 (ふるさと祭・フンベ祭り・ししゃも祭り)
文化の伝承・後継者育成活動 (伝承文化講座、出前講座、自主研修)
管内外支部との交流による課題解決の推進
アイヌ民族展示室の充実
先人の納骨堂の供養
ウレシバ・チセの管理及び利活用
会員の生活改善事業の実施

また、文化実践活動の1つとして、アイヌ語教室（現在はアイヌ語上級講座）がある。1991（平成3）年、協会が白糠生活館<sup>1)</sup>でアイヌ語教室を開講した。教室開講当初は、主に初心者を対象にカルタ遊びを交えてアイヌ語を学んだり、アイヌ語の地名を勉強したりしていた。実際に、アイヌ語の地名を見に行く体験授業も年に2度行われていた。1996（平成8）年からは、STVラジオのアイヌ語ラジオ講座の講師を務めたこともある高木喜久恵さんが講師となった<sup>2)</sup>。当時の受講者数は10名で、年齢層ごとの内訳は10代：2名、30代：1名、50代：2名、60代：1名、70代：4名だった。月に2度、18時から21時に実施されていた。また、1998（平成10）年度からはアイヌ語弁論大会（アイヌ文化振興財団主催）にも参加するようになり、2002（平成14）年第6回アイヌ語弁論大会口承文芸部門で75歳の菊池カヨさんが白糠アイヌ語教室として初めて入賞（優秀賞）した。

しかしながら、白糠アイヌ語教室は2009（平成21）年に閉講した。つねに10人前後の参加者がいたにもかかわらず教室が閉講した直接的な原因是、協会本部とのトラブルであった。具体的には、「アイヌ語教室の実施日を1日早めたことにより協会本部から補助金の返還を要求された」（2015年2月：白糠アイヌ協会会長へのインタビューより）ことによる。こうして、アイヌ語教室が閉講したことにより、「アイヌ語上級講座」が開講されるようになった。アイヌ語上級講座とは、将来的に指導者となる上級話者の育成を図る講座となっており、初心者を対象にしたアイヌ語教室とは主旨が異なっている。具体的な変化としては、講座の中心がユーカラ（口承文芸）になったこと、

そして弁論大会に参加しなくなったことである。

今後の課題としては、アイヌ語上級講座の「受講者が高齢化していること」があげられる。これは、アイヌ語教室からアイヌ語上級講座になったことにより、主旨が変わり、対象が変化したことの影響が考えられる。なお、アイヌ語上級講座は協会員限定の講座ではなく、和人の参加も認められている。現在は和人の参加者が1名おり、協会としてもアイヌ語に興味のある和人を歓迎している（2015年2月：白糠アイヌ協会会長へのインタビューより）。

## （2）白糠アイヌ文化保存会

協会が結成されてから38年後の1984（昭和59）年4月にアイヌ協会白糠支部の婦人部（文化部）から白糠アイヌ文化保存会（以下、保存会）が立ち上げられた。古式舞踊（リムセ）を中心として、イナウ作り、キナ編み等アイヌ文化の保存・伝承活動を積極的に継続している。同年には、「アイヌ古式舞踊」が国の重要無形民俗文化財として指定されており、この白糠アイヌ文化保存会の古式舞踊も1994（平成6）年に追加指定された。2002年当時、会員数40名強、14曲のリムセ（舞）と8曲のウポポ（歌）、ムックリの演奏ができるようになった。

表5－2 白糠アイヌ文化保存会事業一覧（平成25年度）

項目
白糠アイヌ文化の調査研究、保存伝承の振興にあたる。
オッパイ山祭り（上土幌音更）
第35回ふるさと祭り（チセ）
第18回フンペ祭り（パシクル浜・チセ）
第34回シシャモ祭り
第60回阿寒まりも祭り（阿寒湖）
八王子市アイヌ文化交流会（東京八王子市）
アイヌ文化出前講座（地域の小中学校）
リムセ練習8回
シャクシャイン法要祭（静内町真歌）
函館アイヌ文化フェスティバル（函館市）
苦小牧カムイチエップ（苦小牧市）
台湾島来区視察団歓迎行事（チセ）
アイヌ文化道東連合保存会交流会（阿寒湖）

保存会には、補助金が白糠町（社会教育課文化振興係）から交付されており、2013（平成25）年度には表5－2に示した13の事業が認定されている。このうち、2007（平成19）年に白糠町が「アイヌ文化年」を宣言したことにより実施されるようになったものとして、八王子市や台湾少数民族との文化交流、地域の小中学校でアイヌ料理や踊りを披露する「アイヌ文化出前講座」などがある。出前講座は白糠町内全小中学校で年に数回、アイヌ語、ムックリ演奏、歌と踊りについて解説し、実際にムックリ演奏や歌と踊りを行う。

保存会は協会未加入者でも加入することができ、実際に、協会未加入者の和人が1～3名いる。

## （3）白糠ムックリ愛好会「シノッチャの会」

1990（平成2）年に設立されたムックリの愛好会、2002年当時の会員数は14名。会員は全道から集まっており、多い時には30名以上の会員を擁していた。会の目的は「ムックリが好きで、自

然がすき、アイヌ伝統文化を愛し自分で演奏したり製作したり文化伝承・保存、調査研究をつづけ、幅広くアイヌ文化と自然を大切に自然と共に生きる事を目的として活動する」とされている。2002年に、ノルウェー（ローランド）で開催された第4回国際口琴フェスティバル（大会）に参加し、2005（平成17）年にはオランダ（アムステルダム）で開催された第5回国際口琴フェスティバル（大会）にも参加している。設立者であり「シノッチャの会」の会長である高木喜久恵さんは1996年からアイヌ語教室講師も務めている。さまざまな功績が称えられ、アイヌ文化財団によって2014年度「アイヌ文化奨励賞」を個人で獲得している。しかしながら「シノッチャの会」は2014年現在、若い世代の人手不足によって実質的には活動休止状態になっている。

#### （4）白糠三大祭り

白糠で行われる三大祭りは儀式としての色合いが濃く、厳格に行われている。祭りそれぞれに固有の起源や重要な意味合いがある。協会員は原則的に参加することになっており、参加者は多い時で100名ほどいたが、ここ数年は減少し、30名強の規模になっている。

ししゃも祭りは三大祭りの中でも参加者が多いが、これは11月という道内におけるおおかたのアイヌ関連行事が終わっているため、参加しやすいという時期的な影響もある。三大祭りへの参加形態は大きく2つに分類できる。儀式と準備である。儀式は基本的に関係者の方々が執り行い、そこには和人の行政関係者や教育関係者が招待される。また、準備では行政関係者、儀式には参加しないアイヌの方々や和人の方も手伝いに来る。

##### （4）－1 ふるさと祭り

1979（昭和54）年から毎年開催されている、先祖供養のための祭り。もともと、アイヌ墓地のあつた場でお盆の中日に仏式による先祖供養がされてきた。白糠町と共催によるイチャルパ（先祖供養）が1978（昭和53）年に初めて行われたことをきっかけにして、後述する「アイヌ先祖のための弔魂碑」が1979年に建立されて以降を「ふるさと祭り」としている。当時は、カムイノミ（神への祈り）、奉納舞踊を弔魂碑の前で行っていたが、1992（平成4）年にウレシパ・チセが完成してからは、カムイノミをチセで行い、弔魂碑に移動してから改めてカムイノミと奉納舞踊を行うようになった。その後の懇親会ではアイヌの伝統料理が振る舞われる。

##### （4）－2 フンペ祭り

古式舞踊が国の重要無形民俗文化財に指定されたのを機に、1996年から毎年開催されている。フンペとは鯨のことであり、パシクル（馬主来）沼に打ちあがった鯨によって飢えをしのいだとされる伝説から神の恵みに感謝する祭りである。パシクル沼にあるフンペ像には、神の恵みに対する感謝のために即興的にリムセが舞われたというフンペリムセ（古式舞踊）の起源が刻まれている。

##### （4）－3 ししゃも祭り

1980（昭和55）年から毎年開催されている、昔から白糠のアイヌに食べられてきたししゃもの祭り。「自然の恵みししゃもに感謝し、その命を神のもとへ送り、その年のししゃもの豊漁と安全操業を祈願するアイヌの伝統の祭りで、鶴川や門別、静内などの全道各地で行われている」（シラ

リカコタン編集委員会編 2003：103)。ウレシパ・チセ(伝統的な家屋)でカムイノミ(神への祈り)をした後、茶路川河畔にてカムイノミ、イチャルパを行い、ししゃもを捧げ、最後に古式舞踊を奉納する。その後、文化交流会がウレシパ・チセで行われ、ししゃもやアイヌ料理が振る舞われる。町外の方にはシシャモのつかみ取りも開催される。



写真5－1 三大祭りのパンフレット

#### (5) 物理的空間——アイヌ弔魂碑、ウレシパ・チセ——

アイヌ弔魂碑およびウレシパ・チセは伝統的な儀式を行う重要な場となっている。それぞれが作られた経緯を説明していこう。

白糠先駆者アイヌ弔魂碑は1979年に建立されたことは前述したとおりである。これに先立って、1978年、白糠先駆者アイヌ弔魂碑建立趣意書が提出されていた。ここには「私ども白糠アイヌは白糠町と共に、白糠町始まって以来、初のイチャルパ(先祖の靈を弔う供養祭)をもちました。そのとき、私どもには先祖の靈をまつた慰靈碑がありませんでしたので、白糠町石炭岬の奥まった墓地にある地蔵さんの前に祭壇をもうけてお詣りをいたしました」と書かれており、先祖供養をするための場を持つことを要求している。予算は町の助成が50万円、ウタリ協会が50万円、一般寄付が100万円とされていたが、最終的に寄附金が220万円に達した。実際に使われた費用の内訳は明らかではないが、多くは寄附金によってまかなわれていたということがわかる。

ウレシパ・チセは1992年に白糠町和天別に完成した。これは「ウタリ住民の福祉向上と文化の伝承を図るため、集会や祭事、古式舞踊の研鑽や発表、伝統品の制作などを行うウタリ住民の生活活動拠点施設」(シラリカコタン編集委員会編 2003：95)である。この施設では、カムイノミのほか、数々のライブなどが実施されている。なお、チセ建設費総額29,816千円のうち大半を白糠町が負担している。(2015年2月：白糠アイヌ協会会長へのインタビューより)



写真5－2 アイヌ弔魂碑



写真5－3 アイヌ弔魂碑がある高台から見える景色



写真5－4 ウレシパ・チセ内観



写真5－5 ウレシパ・チセ外観

#### (6) 白糠「アイヌ文化年」

2007年に白糠町は「アイヌ文化年」として文化に関する様々な取り組みを推奨した。背景にあつたのは、市町村合併の是非を問う住民投票の結果、白糠町は自立の道を歩むことになったことがある。当時の町長は「自分たちの足元を見直そう」という方針を立て、同年に第20回アイヌ民族文化祭・第11回アイヌ弁論大会（ウタリ協会主催）が白糠町で開催されることもあり、「アイヌ文化年」に至った。竹内（2009）によると、主な企画は以下の通りである。

表5－3 アイヌ文化年に行われた企画一覧

企画内容
「アイヌ詞曲舞踏団 モシリ」公演
アイヌ文化出前講座
チセ・ライブ
アイヌ工芸作品展
例年実施の三大祭り
アイヌ文様刺しゅうなどの講習会
第11回アイヌ弁論大会への協賛

「アイヌ詞曲舞踏団 モシリ」とは、伝統芸能をもとにし、現代風にアレンジしたステージであり、中心メンバーが白糠町出身である。アイヌ文化出前講座とは、ムックリ（口琴）演奏講習や、古式舞踊体験学習などの小学校などへの出前講座である。なお、白糠小学校においては「アイヌ文化年」以前の1997（平成9）年の「ふるさと教育」開始時から出前講座が行われていた。チセ・ライブは、ウレシパ・チセでの多彩なライブ企画のことである。アイヌ工芸品作品展とは、地元出身のアイヌ優秀工芸師・間宮喜代子氏の個展である。また、協会会长は当時の様子を、「町が積極的に協力して頂いたからこそできた。アイヌ文化祭では、町内の全校生徒が参加し、何台ものバスを使用して児童生徒が集められ、大きな賑わいを見せていた。実感としては、白糠町ではアイヌ文化年がアイヌ文化振興法の制定よりも身近で大きな影響を与えた」（2015年2月：白糠アイヌ協会会长へのインタビューより）と語っている。



写真5-6 今までに行われたライブの数々  
(2007年白糠アイヌ文化年 チセ・ライブ第1弾～第5弾)



写真5-7 アイヌ詞曲舞踊団 MOSHIRI ライブ (2007年白糠アイヌ文化年)

## 第2節 アイヌ文化実践の担い手について

### 第1項 アイヌ文化の実践

第1節では、アイヌ文化実践を支えている白糠町の環境・社会集団をまとめた。白糠町では、1979年に白糠アイヌ先駆者弔魂碑が建立されて以来、イチャルパ（先祖供養）が毎年行われている。つまり、青年層（20～30代）は幼少期からこのような祭りが行われていた層になる。さらに、1984年に白糠アイヌ文化保存会が設立、1990年に「シノッチャの会」設立、1991年に白糠アイヌ語教室が開講され、白糠町を取りまく文化実践の場は変化していった。このような変化は文化の担い手に影響を与えていたのだろうか。

今回の調査では青年層（20～30代）：16名（和人3名）、壮年層（40～50代）：12名（和人2名のうち1名和人養子）、老年層（60代以上）：20名（和人6名（血筋不明の1名を含む）のうち1名和人養子）の合計48名にインタビューを行った。

このうち、「現在実践しているアイヌ文化がある」割合は70.8%であった（和人11名を含まない場合78.4%）。今までの調査結果と比較すると、白糠（70.8%）>むかわ（67.2%）>札幌（64.7%）>新ひだか（47.4%）>伊達（36.3%）と、最も高い割合であることがわかった。

表5-4 アイヌ文化の実践（地域別） 単位：人、%

地域	現在、実践しているアイヌ文化			
	あり	なし		
白糠	34	70.8%	14	29.2%
伊達	17	36.2%	30	63.8%
新ひだか	27	47.4%	30	52.6%
札幌	33	64.7%	18	35.3%
むかわ	61	67.2%	20	32.8%

## 第2項 分析の枠組みについて

第1節からわかるように、白糠町における文化の担い手として重要な属性は白糠アイヌ協会員であることと、白糠アイヌ文化保存会員であることが考えられる。今回の分析では、協会員および保存会員であるかどうかを大きな枠組みとして検討を進めていくこととする。協会員・保存会員をクロスした結果を表5-5に示した。

表5-5 白糠アイヌ協会員×白糠アイヌ文化保存会員

単位：人、%

		白糠アイヌ文化保存会			合計
		現会員	元会員	未加入	
白糠アイヌ協会	現会員	17	2	5	24 (54.5%)
	元会員	1	4	4	9 (20.5%)
	未加入	2	0	9	11 (25.0%)
合計		20 (45.5%)	6 (13.6%)	18 (40.9%)	44 (100%)

注) インタビューから会員であるかどうか判別できない4名を除いた。

調査対象者の中には、各団体の脱会経験者、未加入者も含まれていたことから、グループaを協会・保存会の現会員17名、グループbを協会・保存会の未加入者9名、グループcを脱会経験者11名、そしてグループdをどちらか一方の団体の加入経験が無い者7名とし、4つのグループを設定した。

実際に、この4グループによる分類が文化実践に影響があるかどうか調べるため、インタビューにおいて「現在実践しているアイヌ文化はありますか」という質問に対して得られた回答の文化(踊り、祭事への参加など)個数を数え、グループごとの平均回答数を表5-6に示した。その結果、グループa (8.8個) > グループd (3.4) > グループc (2.7) > グループb (1.1) となった。

表5-6 グループ×アイヌ文化の平均実践個数・度数

単位：個、人

	平均実践個数	度数
グループa：協会・保存会の現会員	8.8	17
グループb：協会・保存会の未加入者	1.1	9
グループc：どちらか一方脱会経験のある者	2.7	11
グループd：どちらか一方加入経験の無い者	3.4	7

グループaとグループbが文化の平均実践個数において両極に位置していたが、中間に位置するグループcとグループdの特徴が明確ではなかった。そこで、図5-3から図5-6において、各グループのヒストグラムを作成した。その結果、グループcはまったく文化を実践していない者と実践している者が2つに分かれ、グループdは文化を実践している者のほうが多いことがわかった。

以上のことから、グループaは協会と保存会の両方に加入し、最も積極的に文化を実践している集団。グループbは協会と保存会の両方に加入せず、文化に対して最も消極的な集団。グループcは何らかの理由によって協会又は保存会から脱会した結果、文化実践が2分している集団。グループdは協会又は保存会に未加入であるものの、文化実践に対しては比較的前向きである集団と特徴づけられる。

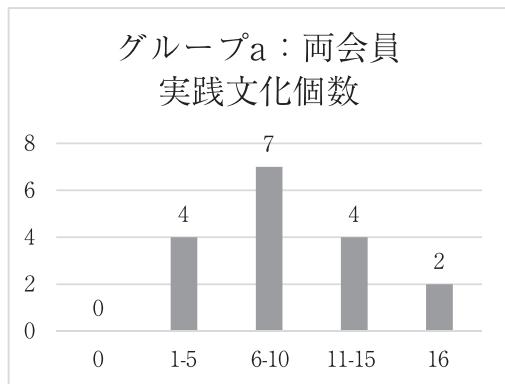


図5－3 グループa：協会員かつ保存会員

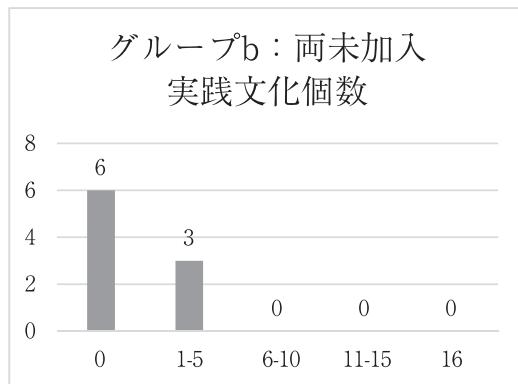


図5－4 グループb：未加入者

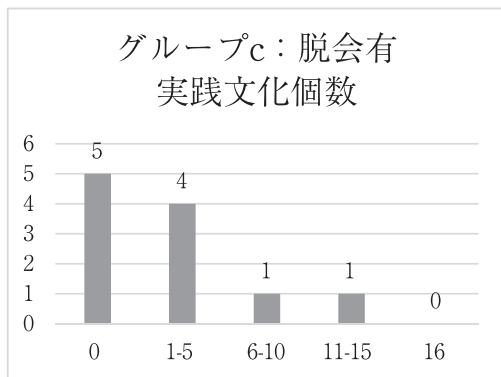


図5－5 グループc：脱会者

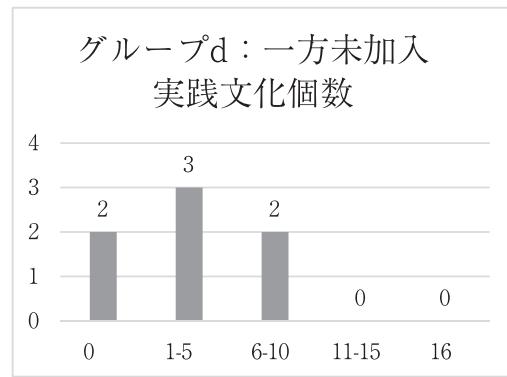


図5－6 グループd：一方のみの未加入者

### 第3項 グループと属性のクロス

ところで、これらの各グループは世代、性別、血筋などの点で、どのような属性の人々に特有に見出せるのであろうか。一般的には、世代で見れば、若年層にはアイヌ文化の実践に最も消極的なグループbが多く、反対に老年層には最もアイヌ文化実践に積極的なグループaが多数派であると考えられる。また、性別や血筋で見ると、男性やアイヌの血が流れていない和人にはグループb、女性やアイヌの血が流れている者にはグループaが多いと予想できる。

だが、実際に、データを分析すると（表5－7～9）、一方で予想どおり女性やアイヌの血が流れている人々にはグループaに属する者が多いが、他方で予想に反して若年層にグループaが比較的多く、和人の場合にも、3割（3人）がグループaに属していることがわかった。また、グループcの割合は世代が上がるにつれて増加していく傾向にあることも明らかになった。それは加齢とともに脱会する機会が増えていくからであると考えられる。ただ、青年層・壮年層においても脱会者が存在することから、彼らがなぜ脱会に至ったのか、そして協会・保存会の脱会前後で文化実践のあり方に変化が起きたのかどうかが問題となる。それが、グループcの特徴である、2分されているアイヌ文化実践のあり方の背景にあると考えられる。



青年層が文化を実践する上での阻害要因となっている。これらの要因が克服されることは、次世代のアイヌ文化実践のためのより良い環境づくりに必須であると考える。そのため、以下で具体的に説明していこう。

まず、「いじめ・差別」に関しては、青年層の過半数が未だにいじめや差別を経験している。グループaの青年層は、過去の差別経験を乗り越えた上で文化を実践している者が多いが、それでも「小さい時に散々いじめられてきた」経験によって、「まだ自分から文化保存のためには動き出す気持ちにはなれていない」(青年層・女性)。また、グループdでは、「これ(いじめ)はもう消せない」(青年層・男性)というように、辛い経験を乗り越えられないことが、保存会に加入していない理由となっている。

次に、「地域住民からの三大祭りに対する理解」に関して、三大祭りは、アイヌの方々にとって重要な儀式となっているが、地域住民からは特に金銭的な面においての批判の声が多いことが現状である。こうした批判は、「アイヌと和人」という対立意識を生みかねない。周囲から「何か嫌な事を言われる」(老年層・女性)ことは、文化実践の意欲を削ぐ要因にもなる。金銭的な面においては、白糠町が補助金を交付しているため、「身内がいても参加しづらい」(青年層・和人男性)という三大祭りは今後、地域住民が参加しやすい雰囲気を作り、実際に参加してもらうことで、三大祭りに対する理解を深めることができるのでないか。

最後に、「協会加入にメリットを感じない」という問題がある。グループdには協会未加入者の青年層が2名いるが、どちらも「協会に入るメリットがない」という理由によって、保存会のみに加入している。この2名はどちらも自分なりに文化を実践している。協会に入る必要性はなく、脱会しても文化活動は継続するという意見は、グループaにおいても見られていた。なぜ、協会に加入する必要があるのかを再考し、青年層に示すことが必要になる。

課題がある一方で、展望もある。現在の小・中学校では、差別や偏見が薄れていることを多くの者が実感している。また、いわゆる「観光としてのアイヌ」に抵抗感がありながらも、実際に三大祭りに長年参加しているアイヌ血筋の方々の中には、「利用されていると感じる人もいるが、和人の意識を変え、アイヌ民族の事を理解してもらうことが必要」(老年層・女性)や、「理解を得るためにには町内の和人を多く呼ぶべき」(青年層・女性)といった声が出ていることから、地域住民と共に学び、理解を深め合うオープンな場となることで、金銭的な面に対する批判はなくなっていくのではないだろうか。その際、祭りの「儀式」としての側面は参加者にとって非常に重要であることを前提とし、十分に尊重した上であり方を模索することが必要である。こうした、協会や保存会の組織としての方針を広く白糠町内の住民やアイヌの方々と協力して吟味することによって、自ずと協会加入のメリットも明確になっていくであろう。

表5-10 青年層：グループa

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数
青年層	○	○	男性	5
青年層	○	和人	男性	13
青年層	○	和人	女性	9
青年層	○	和人	女性	7
青年層	○	和人	女性	7
青年層	○	-	女性	5

注) 和人を除く、○はアイヌ血筋を表す

表5－11 青年層：グループb

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数
青年層	○	和人	女性	0
青年層	○	-	女性	2

注) 和人を除く、○はアイヌ血筋を表す

表5－12 青年層：グループd

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数	協会員	保存会員
青年層	○	和人	男性	6	現	未
青年層	○	和人	女性	8	未	現
青年層	○	-	男性	5	未	現

注) 和人を除く、○はアイヌ血筋を表す

## (2) アイヌ文化実践に積極的な和人

次に、グループaに属する和人について見てみると（表5－13）、彼らが文化実践に積極的になる直接的な原因は、「アイヌ協会への加入」「アイヌ文化保存会への加入」であることがわかる。しかし、協会への加入は強制ではなく、任意である。任意である協会や文化保存会に参加し、積極的に文化を実践するようになる要因として主に2つの可能性がある。

まず、配偶者が文化実践に積極的であるということ。グループaにおける2名があてはまる。2名の配偶者はそれぞれ、同じくグループaに含まれている事例と、積極的に文化実践に関わっている著名な人物が配偶者である事例であった。これらの場合は、自分自身のことを「アイヌ民族の一員」として強く意識するようになり、長年にわたる文化活動の結果、アイヌコミュニティの中でリーダー的な存在になる者もいた。グループbの分析においても配偶者の積極性によって2パターンに分かれていた（表5－14）。両団体に未加入である和人の青年層男性は、現時点ではアイヌ文化に関して何も行っていないものの、配偶者が文化を積極的に実践していることから、文化に関わる機会が増え、興味を持つようになっていた。今後は、三大祭りに参加してみたいという意欲も見られる。逆に、和人の壮年層女性の場合、配偶者や親族が文化活動に対して消極的であることから、文化に触れることがなく、意識に変化が見られない。これらのことから、配偶者の文化実践活動に対する意識が、和人に対して大きな影響を持っていると考えられる。

次に、配偶者及びその親族がアイヌ血筋であることによって和人がアイヌ関係の仕事に就くことが影響する場合がある。この場合、自分自身も配偶者もアイヌ民族であるという意識が強くはない（前掲表5－13）。しかし、アイヌ関係の仕事に就くという理由から協会に加入し、これがきっかけとなり、アイヌ語や刺繡に関わるようになったケースもある。協会員であることから三大祭りには毎回欠かさず参加しており、アイヌ料理を作るようにもなっている。

こうして、和人であっても、アイヌである配偶者の積極的な文化実践や、アイヌ文化に触れる機会の増大によって、アイヌ文化実践に積極的になることがわかる。

表5－13 和人：グループa

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数
青年層	和人	○	女性	11
壮年層	和人	○	女性	4
老年層	和人	○	男性	13

注) ○はアイヌ血筋を表す

表5-14 和人：グループb

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数
青年層	和人	○	男性	0
壮年層	和人	和人（アイヌ養父母）	女性	0

注) ○はアイヌ血筋を表す

表5-15 和人：グループd

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数	協会員	保存会員
青年層	和人	○	女性	0	現	未
老年層	和人	○	男性	1	現	未

注) ○はアイヌ血筋を表す

### (3) 脱会とアイヌ文化実践

最後に、協会や保存会からの脱会の持つ意味について検討してみよう。

協会を脱会している者は9名いる（表5-16）。脱会した理由は、身体的な都合（3名）、時間的都合（3名）、協会に対するマイナスの感情によるもの（3名）、奨学金のみの利用（1名）だった。身体的な都合は、文化活動に参加できなくなってしまい、「迷惑がかかってしまうのではないか」という思いが脱会の主な理由となっている。この理由をあげた者の中には青年層も含まれており、世代にかかわらず病気などによって活動継続が困難になる可能性がある。しかし、青年層の場合、協会に対するマイナスの感情も同時に脱会の理由となっていた。これは、上の世代の方々との考え方方が違うこと、三大祭りの手伝いをしても感謝の言葉がないことに「嫌気がさした」という内容である。また、活動するのであれば「真面目にやってほしい」という思いがあり、单刀直入に「上の世代がいなくなれば参加する」ということを「はっきりと言おうと思っている」（青年層・男性）。

一方、保存会を脱会している者は6名いる。脱会した理由は、身体的な都合（2名）、時間的都合（1名）、保存会に対するマイナス感情によるもの（4名）だった。

協会や保存会に対しては、中には厳しい意見も見られた。その中の1つとして、三大祭りの運営に関するものがある。老年層の男性はこれらの祭りに関して、文化に対しては共鳴し、素晴らしいと思う一方で、儀式に関するお祭り騒ぎだけがメインになっていることは問題だと指摘している。1つの儀式であれば、文化やその歴史についてお互いに学習し合い、参加者にも説明し理解してもらうようにするべきであり、現在はそのための大変な努力が足りていない。上から与えられた予算をどのようにして100%使い切るかということに重点が置かれていて「見苦しさを感じる」。過去に苦労した先人の歴史をしっかりと認識しながら、自分たちで生きていく力を養っていくべきだということであった。同様の意見が少なくとも4例あり、アイヌ血筋同士であっても「仲の良い人でまとまってしまう傾向があり、権力が固まってしまう。そのため、話し合いを設けるような感じではない」（老年層・女性）状態になっているということであった。

こうした、「協会への不満」という理由から脱会した者は、三大祭りや保存会の活動には参加することができなくなる。そのため、自ずとアイヌ文化実践が行われなくなる。しかし、中には協会や保存会から脱会しても、アイヌ文化実践を続けている者もいる。これによって、グループc内にアイヌ文化実践のあり方に2つのタイプが生じることになる。実際、「協会への不満」という理由で脱会したにもかかわらず、アイヌの踊りが好きで、踊るためだけに阿寒湖まで行く者もいた。

本来であれば、協会や保存会に加入し、組織的に活動を継続していくことが望ましいことであろう。そして、活動を通して、同じアイヌの人同士がまとまって協力していくことが重要ではないだろうか。その意味で、それまで共に活動していた者が脱会していく現状自体、課題といえよう。

表5－16 グループc

世代	血筋	配偶者の血筋	性別	個数	協会員	保存会員
青年層	○	—	男性	6	元	元
壮年層	○	和人	男性	0	元	未
壮年層	○	○	女性	3	元	元
老年層	和人	○	女性	4	元	元
老年層	○	不明	女性	1	元	元
老年層	○	和人	女性	4	元	現
老年層	○	和人	女性	0	元	未
老年層	○	○	女性	0	元	未
老年層	○	—	女性	12	現	元

注) 和人を除く、○はアイヌ血筋を表す

### 第3節　まとめ

白糠町の歴史を改めて振り返ってみると、1946年にアイヌ協会白糠支部が設立された。これはアイヌ文化伝承・生活の基盤を支え合う根本となる組織であった。それから38年後の1984年になり、アイヌ協会白糠支部の婦人部から白糠アイヌ文化保存会が発足した。白糠アイヌ文化保存会は白糠アイヌ文化を伝承するにあたって大きな役割を果たし続けている。そして約20年が経った2007年に、大きな転機となった「白糠アイヌ文化年」が宣言される。以降、現在に至るまで町内・道内・国内・海外各地で様々な文化交流が行われるようになった。こうした大きな歴史の中で、白糠町では1979年からイチャルパ（先祖供養）の儀式である「ふるさと祭り」、1980年から「しじやも祭り」、そして1996年から「フンペ祭り」が毎年伝統的に開催されている。こうした儀式を執り行うための場所となる「白糠先駆者アイヌ弔魂碑」や「ウレシバ・チセ」も建設されており、白糠町は比較的、アイヌ文化を実践しやすい物理的環境・社会集団が整備されつつあるといえるだろう。

白糠町では文化を実践するうえでの「環境」が整えられつつあることは間違いない。それを背景にして、他の地域と比べ、積極的にアイヌ文化を実践している姿が見出された。女性たちがアイヌ文化に積極的に関与している姿は、他の地域でも見られることが多い。しかし、白糠町では青年層にアイヌ文化を積極的に実践している者が多く見られた。また、和人であっても、配偶者が積極的にアイヌ文化を実践していたり、自らがアイヌ関係の仕事に従事したりすることを通じて、アイヌ文化実践を行う事例も見られた。

しかし、アイヌ文化実践をさらに活発に展開していくことを目指す場合、課題となる点もあった。積極的にアイヌ文化実践をしている者が多い青年層からも、未だに残るいじめ・差別の問題、三大祭りへの地域住民からの理解不足、協会に加入するメリットの不明確さなどが指摘されていた。だが、全体を通じて、最も大きな課題は、アイヌ文化実践を支えるアイヌ協会やアイヌ文化保存会から脱退する者が少なからず存在していることであった。事実、脱退の理由は様々であるものの、脱退を契機にアイヌ文化を実践しなくなる者が少なからず見出された。アイヌ文化を継承・発展させる上で、見過ごすことができない現実である。逆にいえば、協会や保存会がアイヌ文化実践を支え

る最も重要な「環境」であることを物語っている。それゆえ、協会や保存会がアイヌ文化の継承・発展を目指すためには、少なくともアイヌ文化に興味を持つ人々を自らの会員として維持できるような取り組みをしていく必要がある。協会や保存会を脱退した後にも、自ら独自にアイヌ文化を実践している者が存在したことが、この点の重要性を浮き彫りにしていたといえる。

今後は、このような課題を1つずつ解決していく、自由に文化を実践できるような「環境」を目指していく必要があるのではないだろうか。

### 注

- 1) 生活館は主にアイヌの方々を対象としてアドバイザーの方が様々な相談を受けたり、会合を開いたりするための施設である。かつては白糠町に2軒あったが、そのうちの1つは7年ほど前に老朽化・会員数の減少が原因で閉館となった。
- 2) 高木さんは、2002年時点で白糠ムックリ愛好会「シノッチャの会」の会長としても活動していた。

### 参考文献

シラリカコタン編集委員会編, 2003,『シラリカ コタン——白糠アイヌ文化の継承——』時田岩吉・竹内渉, 2009,「2007 しらぬかアイヌ文化年 ウレシパシラリカ」竹内渉『北の風 南の風 部落、アイヌ、沖縄。そして反差別』解放出版社, 80-83 (初出は『けーし風』57号、2007年12月) .

(世良 尚也・小内 透)